

キリスト道講演会

わがうちに在すキリスト (東京 第4回)

2005年10月16日 (東京 法曹会館)

奥田 昌道

キリスト道講演会 聖霊の働きに驚嘆 聖書のドラマです 「無者」とお呼びする方 創られた方の意志 父の懐の中 我と父とは一つなり 永遠の生命をいただく 二者択一 言は霊と一つ キリストと直結する 「わしが付いているよ」 一粒の麦 十字架の死 私を見た者は父を見た 助け主・聖霊 キリストの分霊 パウロの生き方 キリストと共に十字架に キリストの愛のいかにかりなるか キリストの輝き 祈り

●キリスト道講演会

今年から、この講演会の名称を「キリスト道講演会」という名称に変えました。「キリスト教」という教えではない。「教え」の部分もあるけれども、本来、「道」、人間の生き方そのものです。キリストは教えを説きたもう方ではなくて、

「私が神さまの中に生きていくように、みんなも生きてほしい。私の中に充滿して
いる生命をみんなに差し上げたい。一緒に生きよう」

という、そういう生命そのものを我々にくださった。それを「はいつ」と言って受けなければよかったのに、当時の人々——福音書に書かれていますイエス・キリストと出会った人たち、とりまく人たち——はなかなかそうはいかなかったようです。キリストは、最後は十字架という実に無残な結果です。これが人間の現実なんです。

けれども、キリストは十字架にかかり、死にっぱなしではない。必ず甦るといふことを弟子たちに約束されました。死体が復活するのではない。霊のからだとなって、霊体となつて甦れてくる。このお方が生きていらつしやる間に残された言葉の数々が福音書に記されているわけです。それを私は今日、皆さまと——ヨハネ伝からたくさん言葉を引用しました——それをじっくり味わいたいと思います。その中に、

「我は道なり、真理なり、生命なり」(ヨハネ14・6)

という言葉があります。キリストは「我は道なり」と言う。私の恩師の小池辰雄先生は、「日本人は本来、道の民である。茶道、華道、柔道、剣道という。道というのは、

人が命懸けで歩いていく。その中で体得する真理がからだに化体している現実、これを道という。日本人は古来、その道を求めて歩みつづけてきた道の民である。

だから、キリスト教と言わずして、キリスト道と称う。これが我々にふさわしい。「キリスト道」にしたかったけれども、



「キリスト道？ そんな変なものはやめておこう」

と言って、来てくださらないかもしれない。4回目にして初めて正体を現したと、そういうことであります（笑）。それから、題名も4回目にして初めて、

「わがうちに在すキリスト」

という題にしました。これが一番私の告白したかったことです。去年の題は、

「日常生活の中に生きる聖書」

です。聖書の言葉が日常生活でどうやって生きていくかということ。そういうふうには、だんだん外堀から埋めていって、今回は本当にもろに私の告白したいことをそのまま表して、講演会の名称が「キリスト道講演会」、そして演題が「わがうちに在すキリスト」です。

この「わがうちに在すキリスト」という題をつければ、何をしゃべってもいい。本当に筋書きがありません。私の中に生きていらっしやるキリストを告白すればいい。そして、それが皆さんの中に浸透していって、「ああ、一緒だ。先生は先覚者、あるいは先に歩んだ人だ。自分たちも一緒に行こう、歩こう、マラソンしよう」と。そういうことで、今日はどうしても私はうれしい気持ちでここにおります。ですから、ここにいらっしやる方々は、この2時間が終わるころには私と同じ気持ちになって、酔うがごとく、「いやあ、いい湯だったな、今日は」と思つて、楽しんで喜んで帰っていただきたい。そんなふうに思っている。大体、日本に伝えられたキリスト教は、それからその後を受け継いで日本で伝道なさっている先生方はみなまじめすぎる。

「キリスト教とは、かく生きねばならない。こうせねばならない」

と。四角四面な教えとしてそれをお伝えくださったものですから、こちらまでが窮屈になります。それで、

「キリスト教は日本人には向かない。第一、あの十字架のキリスト、あんなむごた

らしいものは、我々はごめんだ。我々は自然の中に溶け込んで、『花の下にて春死

なんその如月の望月のころ』と、あれが我々にはいいんだよ」

と、そういうことになってくる。無為自然という。自然の中に溶け込んで、自然と共に生きようというのが我々の大和心なんですけれども、その大和心も大和心だけだったらはないではないですか。その大和心がはかなくなると、

「桜は散つても散らない。桜の生命がわがうちにある。散つた桜は永遠だよ」

という、そういうとこしえのもの、永遠のものをやはり我々は求めていると思ふんです。

そういう私たちの心の欲求は、何も日本人だけではない。人間すべてに共通するものだと思います。もしも、人間に共通のものがなかったら、この地球は一つになれない。グローバリゼーションだとか、国境がなくなつたとか言いましても、本当に我々を一つに結び合わせる根底は何か。それはみんな、人は人として生きていく——ドイツ語でいえば「メンシエン」(Menschen)、英語では「ヒューマンビーイング」(human being)——その「メンシエン」



であり「ヒューマンビーイング」であるという共通のものは何かというと、「ハートを持っている人」だということです。

私は聖書にぶつかって、小池辰雄という方を通して、聖書を読む目が開かれました、

「なるほど、聖書というのはこんなに素晴らしいものか」

ということに目覚めた。そして、目覚めたら、それを伝えないではいられない。この世の中で少し堅苦しい窮屈なキリスト教がまかり通っていて、それが逆に人々を遠ざけている。これをぶちこわさないといけない、抵抗勢力と戦わねばならない。そういう思いでやってきた。

●聖霊の働きに驚嘆

そこで、この聖書の抜粋を——12頁印刷してありますが——できればこれを全部、今日皆さんと味わいたいと思っている。だから、皆さん、マラソンだと思つて、覚悟をきめてください。これから楽しいマラソンをやります。

この聖書の記事は、福音書はすべてヨハネ伝から選びました。それからあと、パウロ書簡が途中から出てきます。キリストの、まあ言うならば一番弟子と言つてもいいパウロの言葉が後半部に出てくる。それから、残りの時間があれば私の告白ということになります。この聖書の言葉を読みながら、私の告白が随所に挿入されると思いますけれども、そんなふうに考えております。2時間くらいは、あつというまにたちます。

皆さま、昨年おいでになつた方は、『エン・クリスト』誌58号を受けとつていただいたと思います。これは「小池辰雄先生誕生百年記念」ということで、小池辰雄先生が講演なさった短い講演の要約と、あと私が先生を紹介した文章、そして、昨年ここで講演しましたもの(2004/10/17「日常生活の中に生きる聖書」)をほぼそのままの形で復元したものが収録されている。その中に、小池先生の書かれた「私の信ずる無者キリスト」という文章が一番冒頭にある。これは1982年10月31日にNHKラジオ第二放送の「宗教の時間」で放送されたものです。この中の一行だけ申し上げたいと思います。

「イエスは地上にあつて歴史の終末の神の国を身边に体现している人でした。福音書に表れている聖霊の働きにただただ驚嘆するばかりです。」

という一行がある。

皆さま、聖書を読まれるにしても、誰かの文章を読むにしても、だからだらだと読んで終わりではなくて、その中の一行でもキラッキラツと光っているものがあつたら、それをキャッチしてそれを自分の中で反芻する。そういう読み方をしていただきたい。日によってその一行は全然別のところが自分をとらえるかもしれない。いい文章とか、特に聖書のような素晴らしいものは、一回読んで読みましたでは絶対ない。何百回読んで、なお新しいものが迫ってくる。今日私をとらえた言葉と、明日私をとらえられる言葉は違うかもしれない。



きつと違って当たり前なんです。

聖書の言葉というのは、キリストが直々に皆さまお一人一人に語りかけている言葉として読んでいただきたい。この福音書の言葉というのは、確かに2千年前のキリストがどのように歩まれ、このように語られた、それを記録したものです。それもある程度、再構成されているから、決して時間的順序があのようなものではありません。新聞記事ではありません。それぞれの福音書を書いた方々が一番訴えたいことを中心にして、それを再構成してきますから、一種のドラマです。

●聖書のドラマです

脚本とか、そういうものかもしれません。けれども、そのドラマが再現されてきますと、それが生き生きとその当時の状況をよみがえらせて、その読み手、観客を魅了して、つかみかかってその中に入りこんでしまうという、そういう生き物なんです。

しかも、キリストは今も生きていらつしやる。キリストが生きていらつしやるという一つの証拠はパウロです。パウロはキリストに逆らっていたユダヤ教徒です。ユダヤ教の中のチャンピオン、リーダーだった。それが、

「キリストとやらがユダヤ教をぶち壊すようなことを言い出すものだから、あれは許してはおけない」

というので、キリスト教徒を迫害する殺害の意気をはずませて、エルサレムからダマスコへと向かう途上、白昼に光が現れて、パウロ（サウロ）はその光に撃たれてぶつ倒された。その時、声があった。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

「あなたはどなたですか!？」

「汝が迫害するイエスである！」

と。イエスは天にいらつしやる。けれども、イエスの弟子たちが迫害されている。「汝の迫害するイエスである」という声が臨んできて、パウロは地にぶつ倒されて、目が見えなくなりました。ものが言えなくなつた。三日三晩、飲まず食わずです。彼はもう本当に打ちのめされた。その時に、アナニヤという人にキリストからのお示しがありました。

「アナニヤよ、サウロという青年が今、祈っている。サウロのところを訪ねて

行って、彼のために祈ってやってほしい」

と。そういうお告げがあった。それで、アナニヤはサウロの所へ導かれて行った。アナニヤの按手あんしゅを受けたらサウロは、

「目から鱗うろこの如きものが落ちた」

という。「目からうろこ」というのはあそこからきていると私は思っている。霊眼が開かれた。そして、イエスこそが本当に救い主キリストだということに目覚めた。それからガラツと



変わって、ダマスコで、

「イエスは主なり、キリストなり」

ということを告白しだした。雄弁なパウロですから、周りの人はびつくりしたという。それが使徒行伝というところに書かれています。ペテロやヨハネやヤコブなんていうのはもともと漁師でしたけれども、始めからイエス・キリストにみこまれて、

「私の弟子になりなさい」

「はいっ」

と言って網を捨てて、イエスに従ったということがマタイ、マルコ、ルカの福音書に書かれています。ところが、パウロという人は福音書には出てこない。使徒行伝に初めて出てくる。敵対していたパウロを捕まえてひっくり返して一番弟子にする。味方が讃えるのは当然でしょうけれども、敵であったやつがそのようにひっくり返されて――さしあたり武蔵坊弁慶べんけいです――キリストを最も生々なましく告白して行った。こういう方ですから、そのパウロの告白というのは、我々キリストを知らなかった人間あるいは敵対していた人間にはよくわかるんです。そして、パウロも結局は殉教していきます。ユダヤ教にとっては裏切り者ですから殉教します。そのことはもうイエス・キリストははつきりと初めに言っておられた。

「お前は、私が選んだ私の名を持ち運ぶ選びの器である。けれども、私の名の

ゆえにお前はどんなに苦しい目に会うか。そのことは覚悟しておきなさい。

しかし、私はお前について行くから。」

と言って、復活された霊なるイエスがパウロと一緒にあって小アジア地方を駆けめぐった。それで小アジア地方にキリスト教の教会ができていったわけでしょ。エルサレムには、ペテロとかヤコブとかヨハネとかが残ってそこを守りました。けれども、異邦人伝道をやって行ったのはパウロであり、ルカでした。あるいは、バルナバとか。こういう人たちが異邦人伝道に乗り出していった。その記録が新約聖書の中の、昔で言いますと「使徒行伝」、今は「使徒言行録」といって、新共同訳なんかで伝えられています。

やはり、イエスという方はただものではありません。死につばなしではない。そうやって霊体となって現れてきた。そのあたりを皆さんにたっぷりとわかっていただきたいと思っています。そのイエスという方はどんなお方かということに関して今申し上げましたように、

「イエスは地上にあつて歴史の終末の神の国を身边に体现しているひとでした」

と。イエスが伝えられた神の国というのは、今すぐここにくるのではなかった。世の終わり、終末にやってくる。そのときに完成する神の国は、地上に成就するのではない。この地上がそのまま神の国になるのではない。この地上はいったん亡びて、別次元の神の国がそこに成就する。これが「新天新地」というふうに言われています。それがどんな様なのかは我々



にも全くわかりません。そういう終末において実現する神の国、それをキリストは伝えられた。キリストがなさったさまざまな奇蹟はすべてそのときのシンボル、象徴なんです。だから、

「イエスのなさったことを今この地上にそのまま実現してください」と言ったら、これは間違いなんですね。

●「無者」とお呼びする方

ある時、イエスは五つのパンと二匹の魚で——これは子どもが持っていた——男ばかり五千人、女性も入れたら一万人でしょう。寂しい所ですから店も何もない。群衆が疲れ果てているかもしれない。そういう所でどうしようかと。そういう大群衆の前で、その五つのパンと二匹の魚を手を受けて差し出して祈られた。祈ってから、それをわかち与えらると、それは五千人の人たちに分かち与えられてなくならなかった。残りのパンくずを集めたら、十二のかごに満ち溢れたと書いてある。「そんなばかなことがあるものか」と、理性はそう言います。けれども、福音書はそのことをどうどうと伝えている。そのことを見た人たちはどうしたかというところ、

「イエスを捕まえて王様にしようとした」

と書いてある。こんな方を王様にしたら、食料難はいつべんに解決します。これが人間のあさはかさです。そして、

「イエスはひとり山に逃れた」

と書いてある。イエスがなさったことの本当の意は何であったのか。真意はどこにあったか。そこを求めないで、

「あつ、これは都合のいいことだ。こんなことは未だかつてなかったことだ。つか

まえて、この人を王様にすればいい」

という、どこまでも自分たちの世界を、自分たちの欲望を満たすために、イエスを使おう、利用しよう、つかまえておこうという。これが哀しい人間の性なんです。

けれども、これからヨハネ伝を見ていきますように、イエスという方は全く自分を神の前に投げ出していた方です。全く自分の思いで事をなさらない。すべては父なる神がこのお方に、「これをせよ、あれをせよ、これを語れ」と仰る、その御声のままに従って歩んだお方です。

そういうお方でありますので、小池辰雄はイエスのことを「無者」と呼びました。

「イエスは己無きひと、私心なきひと、神の前に自分をぶちまけている人だ」

と言って、小池辰雄はつかまえた。人としてのイエス、人間としてのイエスです。人としてのイエスは全くそういう意味の「無者」、己を空っぽにしている人でした。ところが、そこに宿った霊、これは聖霊なんです。聖霊は無限無量なる方です。これは神さまの霊です



から。それが宿った。だから、小池辰雄は、

「福音書に現れている聖霊の働きにただただ驚嘆するばかりです」

と言った。イエスの働きは人の業わざではない。神さまの霊がこのイエスという人を通して働いた。

「私は何ものでもなら」

とイエスは言っている。しかも、神さまというお方は、雷かみなりとなつて働かなかった。自然現象として働かなかつた。どこまでも、イエスという人を通して働かれた。人を通して語り、愛のわざをなし、癒いよしのわざをなし、人々をご自分に引き寄せようとされた。イエスという方は天と地とのまさに中間にいる媒介者でした。天と地の間を橋渡しした方です。

神の霊、聖霊がイエスに充滿し、この霊がイエスという人格を通して働いている。御業みわざを展開している。すべては神の業わざ、聖霊の業、働きである。人が行えば、奇蹟、不思議と言う。しかし、聖霊の業ならば、それは奇蹟でも何でもない。聖なる神の意志の働き、作用とその結果に他ならない。人が行うから、摩訶不思議まか、奇蹟だとか、インチキだとか思うでしょ。しかし、神さまが働かれたら、何が起こつても不思議ではない。

●創られた方の意志

「神、はじめに天地を創つくりたまえり」

と旧約聖書の冒頭に書いてある。進化論からいえば、何かマグマが働いて、山々ができたり、海ができたり、大陸ができたりする。これは考古学的に言つたらそうでしょう。けれども、動かしている原動力はどこにあるか。この大宇宙と言つたつて、我々の住んでいるところは本当に小さな所らしい。銀河系があつて、その奥にもつと何かいろんな世界があつて、それら全部を統括かたしている根源霊がもしいるとしたら、それは本当にとつてもない凄い存在でしょ。その方が意志かたを持った存在で、

「光あれ！」

と言われたら、光があつた。何も不思議ではない。

聖書を読みますときに、自然科学的な目で見ますと、これは躓つまずきます。進化論だとか、自然科学的な考古学的なものとかを全部そのまま受け入れて、40億年前から地球ができたのなら、それで結構です。しかし、そういった無生物的な地球でありながら、そこに何らかの法則があるとしみます。宇宙法則があります。星の法則もあります。すべて法則で動いています。地球は自転しながら太陽の周りを回っている。太陽は悠久の昔から我々を照らして生命を与えてくれている。地球上のどこから見ても、太陽は一つです。宇宙旅行をしてこられた方の話によりますと、たくさん星の中で地球というものだけがもの凄く美しいそうですね。

こういう宇宙というものが、もしどなたかの意志によって造られているとしたら、素晴



らしいことです。だから、そのお方の意志が働いたら、どんなことが起きても不思議ではない。しかしながら、神さまはやたらと摩訶不思議はなさらない。イエス・キリストを通して、御意みこころによっていろんな不思議なことをなさる。それに躓いたらいけない。

人が行えば、奇蹟、不思議と言う。しかし、聖霊の業わざならば奇蹟でも何でもない。自然現象ではない。そこに御意が働いている。これを汲みとらねばならない。神さまの啓示である。イエスは人としては神の前に徹底的に「無者」であつた。父なる神を己の存在の一切となしておられた。

神さまのことを「父」と、一体誰が呼べるでしょうか。よく、「私は無神論者だ」、「いや、私は神を信ずる」と、口角泡をとばして議論をしている。神さまは笑っていると思うんです、「無神論とか有神論で私をつかまえることができるものか」

と。そうでしょ。「私は神を信ずる」と言つたつて、そしたら、

「あなたの中に神さまは生きているの？ あなたは神さまの中に生きているの？」

と聞かれたら、誰も「はい」と言えない。当たり前でしょ。私たちは本当に「神さまを捕まえた」とか、「神さまを知っている」とか誰も言えないはずです。もし、「私は神さまを知っている」と言つたら、それはちつぽけな神さまですよ。

「あなたが捕まえるくらいの神さまはちつぽけな神さまです」

と言いたい。神さまなんてつかみどころもない、知りようもない。全くもう途方にくれるような存在です。そのお方を「父よ」と親しく呼んだ人がいた。これが驚きなんです。イエスという方は神さまを「父よ！」と呼ばれた。凄いいと思いますよ。

●父の懐の中

私は福音書を読んで更に凄いいと思いましたのは、たとえばルカの福音書の中に出てくる。

「その頃イエス祈らんとて山にゆき、神に祈りつつ夜を明かしたもう。」（ルカ

6・12）

と。そして、夜明けになつてから、弟子たちを呼び集めて十二弟子を選ばれたという。一体誰が皆さんの中で、どこか寂しい山へ行き、そこで夜を徹して祈り、神さまと一つになるような体験を持たれましたか。どこやらの酒場に行つて酔いつぶれて夜をあかした人はたくさんあるかもしれない。カラオケへ行つて歌いまくつて徹夜をした。これもあるかもしれません。けれども、誰が一体、独り山に行つて、そこで神に祈りつつ夜を明かしたか。楽しかったと思うんです、この御方は。本当にそこは父の懐ふところです。本当に神さまと一つになつている。

「お前は私の愛する者だ」

と、神さまは語りかける。イエスは、

「はい、そうでございます。御意みこころをお示しく下さい」



と、そういう父と子の問答をやっている。誰もこれを聞けない。イエスという方の中だけで起こっていることなんです。けれども、山からおりてこられると、輝いておられる。そして、いろんな御業が起る。そういうことが福音書に書かれています。ルカ伝6章17節、

「17 イエス此等とともに下りて、平かなる処に立ち給いしに、弟子の大なる群衆およびユダヤ全国、エルサレム又ツロ、シドンの海辺より来りて或いは教を聴かんとし、或いは病を医されんとする民の大なる群も、そこにあり。18 穢れし靈に悩まされたる者も医さる。19 能力イエスより出でて、凡ての人を医せば、群衆みなイエスに触らん事を求む。」（ルカ6・17〜19）

いろんな所から集まってくる。その人たちをすべて手を置き癒し給うた。悪しき靈につかれた人、癩癩の靈につかれた人、すべての人たちに手を置き、あるいは言葉を発して、霊を追い出して癒されたと書いてある。何でもなく書いてある。でも、皆さん、その場を思い起こしていただきたい。誰がこんなことができるかと。イエスは神の靈に満たされた方なんです。しかも、

「私は自分からは何も言えない。何もできない。私は、父がせよと仰るとおりにしている。私の教えは私の教えではない。父の教えである」

と。全く自分を空っぽにしている。その無者なる方に無限無量なる神さまが宿って自由自在に働いておられる。イエスは、

「私のわざではない」

と書いておられる。こういう姿に私は本当に驚きます。「ただただ驚くばかりです」と小池辰雄は言いました。聖霊が働いてくださる。キリストは、

「人間イエスを、私のことをボロクソに言ったって大丈夫だ。しかし、私の中に宿っておられる聖霊を汚すものは絶対に赦されない」

と言われた。キリストがいろんなみわざをなさいますと、

「あれは悪霊にとりつかれてやっている。ベルゼブル、悪霊の首によっているんなことをやっているんだ」

ということをパリサイの人たちが言った。それに対してキリストは怒られた。

「人の子の悪口を言ってもいい。しかし、私のうちに宿っているこの聖なる靈、この方を汚す者は絶対に赦されない」

と言われた。それは、イエスという方が、

「自分の中に宿っておられる方は私とは別のお方で、人間としての私とは別のお方が私を宿として、そして御業をなさっている。この御方を汚す者は赦されない」

と、イエスご自身がこの聖なる靈の前に平伏しておられるわけです。

マタイ伝の始めのところにもこんな言葉が出てくる。第4章に、

「²³ イエス遍くガリラヤを巡り、会堂にて教をなし、御国の福音を宣べつたえ、



民の中のもろもろの病、もろもろの疾患をいやし給う。²⁴その噂あまねくシリヤに広まり、人々すべての悩めるもの、即ちさまざまの病と苦痛とに罹れるもの、悪鬼に憑かれたるもの、癩癩および中風の者などを連れ来りたれば、イエス之を医したもう。」(マタイ4・23〜24)

そういうことがさりげなく書かれている。

●我と父とは一つなり

そういうことを少し前置きにいたしました。今日、皆さまのお手元に配らせていただいた聖書の言葉を見ていきたいと思えます。ヨハネ伝の5章のところからです。

「¹⁹イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。²⁰父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。²¹父の死にし者を起こして活し給うごとく、子もまた己が欲する者を活すなり。²²父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。²³これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣し給いし父をも敬わぬなり。』」(ヨハネ5・19〜23)

見えない神さまを見る姿で表してくださいました。そのために遣わされた人がイエスという方でした。だから、イエスは仰った、

「我を見し者は父を見しなり。我と父とは一つなり」

と。私は本当にありがたいと思う。もし、イエスという方がいなかったら、我々は神さまを探し求めても、どこにそれを見ていいのかわからない。自然の花にも神の栄光は表れています。大自然に栄光が表れています。けれども、人格神としての神さま——人格神、人として言葉を交わしあい、抱きあい、手を置いていただけの方。私たちがすりつくことのできる、そういう人格なる神さま——それはいないんです。それまでいろんな預言者が現れました。部分的なことはやってくれました。けれども、全き姿で神さまを顕してくださいました。それがイエスという方なんです。そのイエスが、

「自分は何ものでもない。私を見た者は父を見たのである。私を通して父が御業をなさっている。だから、私の語る言葉を通して父なる神を信じなさい」

と言われた。本当に媒介者になってくれた。だから、私はあるがたい。神さまはどんな方か。イエスのような方、イエスにおいて顕れた方、これが私にとつての神さまです。イエスという方において私は神さまに出会った。そういうことが言えるので、ありがたいんです。

「²⁴誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。」(ヨハネ



「この御方を然りとして、そのお言葉を然りと受けとつたら、既にもうその時、あなたの中に生命は宿っているよ」

と。凄いいことなんです。本当に凄いい。

「いや、将来、十字架にかかられて復活されて聖霊となって来られてからではないですか」

と、神学者は言うかもしれない。けれども、イエスはそんなことは仰らない。

「直ちに今、私を受けとつた者は即、生命である」

と仰る。「はいっ」と言つて、受けとればいい。だから、イエスは、

「おきな幼児のようにならなければ、神の国に入ることとはできない」

と言われた。大人というのは、とかくいろいろ考えすぎる。幼児のごとく神の国を受けとる者でなければ神の国に入れない。「信ぜよ」とは仰らなかつた。神の国を受けとる。神の国に入る。幼児というのは本当にそのまま受けとります。分析・総合なんていう学問の世界ではない。水を飲めば、すーつとしみ込んできます。キリストは、

「**我を食らえ、我を飲め**」

と仰つた。

「私を食べる、私を飲め、身体の中に入れろ」

ということなんです。そういうわかりやすい世界なんです。七面倒くさい分析・総合は学者に任せておきましょう。

●永遠の生命をいただく

我々は生命が欲しい。生命は、生命をいただいてはじめて生命いのちづくんです。生命を注入していただいて我々は生きる。私の中に生命はありません。皆さん、どなたの中にも本当の生命はなかつたはずです。本来、人はオギャーと生まれ、親から生命をいただいて、思春期を迎え、人間としていろいろ生き方を求めていきます。そのときに行き詰まります。なぜならば、自分の中に永遠の生命がないからです。

「私は永遠の生命者である。私はいつ死んだって霊体となって現れてくるぞ」

なんて、そういうことを言える人は誰もいません。私ももちろん言えなかつた。だから、そういう我々にこの生命をもたらせてくれた。そして、キリストは、

「これを受けとれ」

と仰つた。

「はいっ、いただきます」

と、それだけの話なんです。

「24……わが言ことばをききて我を遣し給いし者〔神さま〕を信する人は、永遠の生命

をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。²⁵誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。」

「死にし人」とはお墓の中に眠っている人ですかと。多分、それが本当なんでしょう。けれども、私はそれにとどまらない。キリストを知るまでは、私は「死にし人」でした。自分の中に生命を持つていなかった、死にたるがごとき人でした。ところが、その死にたるがごとき者が神の子の声を聞いた。キリストの声を聞きますと生きた。「聞く人は活くべし」という。

「²⁶これ父みずから生命を有ち給う如く、子にも自ら生命を有つことを得させ、²⁷また人の子たるに因りて

キリストは自分のことを「人の子」という言葉で表されました。

審判する権を与え給いしなり。²⁸汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。²⁹善をなしし者は生命に甦えり、悪を行ひし者は審判に甦えるべし。³⁰我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。³¹我もし己につきて証せば、我が証は真ならず。」(ヨハ

ネ5・24〜31)

「我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求む」という。これなんです。人間はみな「我が意」を求めている。我が意の成就せんことを思つて、いろんなところに願をかけるわけです。「試験に通りますように。いい嫁さんに出会えますように。いい子どもに恵まれますように」とか。全部、自分ですよ。ところが、この御方は違つたんです。

「父よ、あなたの御意を、どうぞ、この私という器を通して地に成らしめてください。天において御意の成るごとく、地にも成らしめてください」

と。これがこの方の祈りだった。

●二者択一

皆さんは仰るかもしれない。

「そんなのは無理だよ。我々は生存競争のはげしい世の中に生きている。規制緩和で自由競争になれば、ますます我々は食うか食われるかだよ。あんたみたいな気楽なことを言つていて大丈夫なの?」

と。私は答えます、

「大丈夫です。何を食べようか、何を飲もうかと、生命のことを思い煩うな、身体のことを思い煩うなど、キリストはちゃんと約束してくれている」

と。私のようなのは単純なんです。こちらにつくか、あちらにつくかの二者択一です。富



この世の神につくか。神さま、本当のキリスト、そのお方につくか。どつちに帰依するか。私は若いときにキリストに帰依しました。それで今日まで歩んできた。キリストに帰依して歩んできて、絶対に間違いがないということを、私は自分の生きてきた過去を通して皆さんに証言できる。いろんな失敗もありました。躓きもありました。けれども、それを全部プラスに変えて、そして、晩年を輝かしてくださいました。

「あんなぶきつちよなやつが何であんなに上手に生きていくのだろうか」

と、人は思うかもしれない。私は自分で何も求めなかった。私はキリストにぶつかって、キリストに弟子入りしてからはもう——キリストが父なる神に「御意を」と言われたのと同じことを——「あなたの御意を」とキリストに祈ってきました。

それは私は一遍死んだからなんです。もう行き詰まって、どん詰まりで死んだから。そのあとの生命はもう私の生命ではないと、おつりの人生だと本当に思った。24歳で、「おつりの人生」だなんて、若年寄りなことを言いますけれども。それから自分の路もだんだん開けてきた。そのあたりの私の歩んだ路は、去年ここで告白しましたので、繰り返しませんが、本当にそうなんです。

「キリスト教」と言ったって、一筋縄ではいきません。いろんなキリスト教がありますから。いろいろ難しいキリスト教がたくさん世の中にある。単純な、本当に生命なるものに触れるまでは、私は辛かったけれども、本当の真清水にぶつかって、それをいただいいてからは本当に単純化されました。だから、皆さまにも、単純なその世界を生きていただきたい。単純なるものが無限性を持っている。本当に不思議なことですけども。

「³⁰我みずから何事もなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。³¹我もし己につきて証せば、我が証は真ならず。……³⁶然れど我にはヨハネの証よりも大なる証あり。父の我にあたえて成し遂げしめ給うわざ、即ち我がおこなう業は、我につきて父の我を遣し給いたるを証し、³⁷また我をおくり給いし父も、我につきて証し給えり。」(ヨハネ5・30〜37)

当時の人たちはイエスのことをなかなか受けとれなかった。

「なんで、あのナザレの大王の小倅が神から遣わされた預言者、お使いなのか。とても信じられん」

と言ってみな躓いた。しかも、律法という今までの言い伝えを割合にキリストは破って行かれた。破られたのではない。本当のものをそこから引き出そうとされた。細々とした律法をぶち破って、本当の生命を与えようとした。それが当時の宗教家たちには我慢がでしなかつた。それで、イエスをつかまえてはいろんな問答をしかけ、何かあればイエスを捕まえて裁判にかけようとか、そういうたくらみが早い時期からそこに満ち満ちていました。人々は、



「お前が神から遣わされた証を見せよ、証明しろ」と言う。それに対してキリストはこう答えた。

「私が行っている業、これは神さまが私を通してなさっている業で、神さまが私をお遣わしになった、その蹟だ」

と。そのことがひとつの証明だと。それから、神ご自身が私のことを証してくださるという。「汝らは未だその御声を聞きし事なく、その御形を見し事なし。その御言は汝らの衷にとどまらず、その遣し給いし者を信ぜぬに因りて知らざるなり。汝らは聖書(旧約聖書)に永遠の生命ありと思いて之を査ぶ、されどこの聖書は我につきて証するものなり。」(ヨハネ5・37〜39)

と。旧約聖書は一切の歴史を通してやがて、このイエスという方が救い主として世に送られてくることを証言している預言の書である。そういうことをここで言っておられる。

●言は霊と一し

「³⁵イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも渴くことなからん。³⁶然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。³⁷父の我に賜うものは皆われに來らん、我にきたる者は、我これを退けず。³⁸夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。』」

自分から来たのではない。お遣わしになった方のご意志にもとづいて私は地にやってきた。それは自分の意志をなそうというのではない。お遣わしになった方の御意を成就する。それだけが私が地上にある唯一の目的であると。それではそのご意志は何か。人々の救われることです。人々に生命を与えること、永遠の生命を与えること、それが父の御意であるという。

³⁹我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。⁴⁰わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』(ヨハネ6・35〜40)

ありがたいことではありませんか。そのために何をせよとも仰らない。ただそれを受け入れなさいと。「信ぜよ」と仰る。その「信ずる」ということは「受け入れる」ということです。それを受け入れるということだけだと。だから、私にはこれは本当にありがたい言葉です。

皆さんは仰るかもしれない。

「二千年前に語られたのがなぜ今でも有効ですか。賞味期限というのはないのですか?」



と(笑)。いや、賞味期限はない。これはいつになっても輝いている。むしろ、私は言いたい。いろんな方が遺言なさいいます。立派な方々の遺言があります。徳川家康も遺言を遺したでしょうし、家訓もありましょう。それは過去の人の言葉ですけど、今もやはり生きています。けれども、ここの言葉がもつと凄^{こたば}いというのは、今生きていらつしやるキリストが後押ししているからなんです。

「この言は本^{ことば}当だよ。あなたはこの言を然りと受けとつたら、私はそれを応援する。」

私と一緒にだよ。この言と私は一つだ」

と、霊なるキリストが言っておられる。これは過去の言ではない。今の言なんです。また、そのように受けとらないと、古典として文学として受けとつたって、何にもならない。

だから、これは一種独特のものなんです。法律の文書でもありません。判決でもありません。文学でもありません。これは一種独特な生命^{いのち}の言^{ことば}です。しかも、その言は霊と一つなんです。言をいただくと、その人の中に言と霊が一つになってしみ込んでいく。飛び込んでいく。そして、その中で芽生えてくる。生命づく。そういう不思議なことなんです。

それを日本人の私^{わたし}がここで声を大にして叫ぶとは。

「ヨーロッパの人たちよ、目を覚ましなさい」

と私は言いたいくらいです。私はドイツにいたとき教会に行つたけれども、こんなことは聞かなかつた。

「イエスの教えやイエスがいろんな奇蹟をなさつたことはみんな神話だ」

と聞かされた。非神話化運動というのがあつて、

「ナザレのイエスは同情深い人でした。慰め深い人でした。弱い人でした。それを

キリストとして祭り上げてはいかん」

なんていう、非神話化運動のブルトマンの神学が風靡^{ふうび}しておりました。それはそういう面もあるでしょう。何も神格化する必要はない。

けれども、そのイエスというお方の中に宿つた聖霊、このお方が凄^{こたば}いということにブルトマンも目覚めてもらわないと困るわけです。ヨーロッパの神学者たちは自分でキリストを体験して、キリストと同じ姿となつて言うなら、私は信頼します。私はいろんな偉い先生方やどなたも、キリストと同じ体験をして、パウロと同じ体験をして、「だから、こうだ」と言えば、「そうですか、手をつなぎましょう」と言います。けれども、概念的に聖書を批判したり、イエスを批判したりするのは絶対だめです。論としては成り立っていても、それはそれだけの話です。

「聖書は我^{あかし}につきて証するものなり」

と、キリストが旧約聖書のことを言われた。今は全く同じように、

「新約聖書は私のことを証言している。私を食べる、私を飲め」

と。その同じ次元の中に入り込んで、そして、「キリストわがうちに宿りたもう」という、



「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

という、その霊なるキリストと本当に一つになって、キリストと同じ生き方をして、同じことがそこに現れていけば、それでいいじゃありませんか。そういう方のお話なら、私は信用します。それ以外は信用しない。

●キリストと直結する

だから、これは大衆に語られる言葉ではないんです。五千人の人がいても、キリストは一人ひとりに語られたはずで、一人ひとりにパンを与えられたはずで、一般大衆ではない。一人ひとりにキリストは呼びかけ、

「あなたと私は一つになりたい。あなたの中に私は今日、宿りたい」

と。そう言っただけで呼びかけておられる、その語りかけなんです。だから、一人ひとりが直接に、キリストに直結して受けていたかかないと、それは意味がない。

私は夜、学生たちと一緒によく御所の中を走ったりする。昼間は忙しくて走れないから、授業が終わって、夜の7時半くらいに御所に集まって、それから走る。ランプが灯ついている。それを目標としますと1キロほどの直線コースが御所にある。それを端から端まで走る。向こうにランプが灯ついている。ランプというのは不思議なもので、八方に光を放っています。八方に光を放っていますけれども、そのうちの一筋の光が私に来ている。ランプと私は直線で結ばれている。その光に向かって私は走っている。

これが福音だと思う。光は八方に現れている。太陽の光もそうです。太陽の光はいろんな方に照っています。けれども、その光が一人の中にスーッとしみ込んでいって、その人をつかまえて温めていく。「ああ、温まった、温まった」という、それなんです。

ですから、「インディビデュアリズム」(individualism)「個人主義」とか言いますが、本当の個人というのは、このキリストなるお方と直結して、その方から本当の生命をいただいて、本当の新しい自分というものに目覚めたときに本当の個人主義が始まる。その個人主義はもはや排他ではありません。もはや己のことを求めない。生きとし生けるものすべてと生命をわかち合おう、幸いをわかち合おう、平和を作り出そうと、そういう気持ちが出てくる本当の「インディビデュアル」(個人、個)なんです。キリストというたった一人の、ナザレのイエスというたった一人の方からそれが始まった。

仏教の方なら、「いや、お釈迦さんだよ」と仰るかもしれない。

「はい、それでも結構です。お釈迦さんだって己のことを求めておられないはずです。自分の中にある永遠のものを分かとうとなさっている。結構ですよ。だから、あなたもお釈迦さんのような存在になってください」

と私はそう言う。それぞれが自分の信服する神さま、あるいは仏さま、そういった偉大な



る霊に対して信服したら、その霊と同じ姿になつてください。100%もらつて、分かち与える存在になつてください。そうしたら、決して排斥し合うわけではない。相抱く関係になります。

キリストはまさにそれです。自分の支配を確立しようなんて思つておられない。自分を犠牲にして十字架で献げた方です。あの無残な十字架の死、これが実は我々の神さまに対する反逆とか背きという罪を全部引き受けた。我々の知らないところで、全部引き受けた。人間に巣くつているところのエゴというもの、神の言をいくら聞いてもすぐに素直に受けとれない。そういう人間の——これを「肉」といいますが——生まれながらの人間性、これは神さまの思いに逆らう。そういう我々を全部引き受けて、十字架にかかつてくださった。これがパウロの告白で、後ほど出てまいります。また、御言の方に戻ります。

「⁵⁷活ける父の我をつかわし、⁵⁸天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん」……⁶³活すものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。」(ヨハネ

6・57、58、63)

「肉」というのは、生まれながらの我々のことを「肉」と言います。それに対して、「霊」というのは神さまからやつてくるものです。これが人を生かす。キリストが語つた言は実は霊であり生命であつた。言と霊とは切つても切れない関係にあります。

「¹⁶イエス答えて言い給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。』¹⁷人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。』¹⁸己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者は真なり、その中に不義なし。」(ヨハネ7・16、18)

と。キリストのいろんな言を素直に受けとれるか、「いや、受けとれません」と言うかは、その方が本当に神の御意を行おうとして、己を空しうして神さまの御意だけを求めて生きようとするか、あるいは、「いや、少しは私の善いところを認めてよ。私のことも少しは考えてよ」なんていう邪心があるか、それによって決まるよということなんです。

「本当に己を空しうして神さまの中に生きようという心根の人ならば、イエスのなさっていること語つておられることが本ものか偽ものかきつとわかるよ」

と。人間の直感というのはするどいんですよ。よく、詐欺がはやつてますね。詐欺に引つかかるのは、どこかやはり自分の側にも何か引つかかる要素がある。そんなことを言う失礼ですけども、やはり欲というものがあつて、うまい話に乗つかつてしまう(笑)。自分に欲得がなければ、人にだまされたり、あらぬ話に引きずり込まれることはきつとないだろうと思う。それでも、人間というものはそういう弱さをもっているところにつけこんでやつてくるから、ますますそれはけしからん話なんですけれども。



ま、そういうことで、私はキリストのこの言は大好きなんです。本当に御意を行おうと思うならば、キリストの語っておられることが、自分から語っておられるのか、神さまの言を取り次いでいるのか、きつとわかるよという。

●「わしが付いているよ」

次にいきます。ヨハネ伝8章23節、

「²³イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出でず。²⁴之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』²⁵彼ら言う『なんじは誰なるか』イエス言い給う『われは正しく汝らに告げ来りし所の者なり。²⁶われ汝らに就きて語るべきこと審くべきこと多し、而して我を遣し給いし者は真なり、我は彼に聴きしその事を世に告ぐるなり』²⁷これは父をさして言い給えるを、彼らは悟らざりき。²⁸爰にイエス言い給う『なんじら人の子を挙げしのち、我の夫なるを知り、又わが己によりて何事をも為さず、ただ父の我に教え給いしごとく、此等のことを語りたるを知らん。²⁹我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行ううによりて、我を独りおき給わず』(ヨハネ8・23〜29)

「人の子を挙げしのち」というのは十字架にかけられることです。

「あなた方が私を十字架にかけてしまったからのちに、あとになって実はあの方は自分からは何もしてなかった、遣わしたもうた父の教えたもうたことだけを語っていたということがわかるであろう」

と。そして、次はイエスの自覚ですね。

「私を遣わしてくださった方は私と一緒にいてくれる。私は常に御意になうことを行っているから、私を独りぼっちにはなさならない」

と。これはうらやましい言葉でしょ。皆さんはどなたか、

「私はいつも神さまの御意を行っているから、神さまは絶対に私を離れない。私の中に神さまはいらっしゃる。絶対に独りぼっちになさらない」

と、こんなことを言えたら凄いですね。手放しては言えません。でも、私たちは今は言えるんです。なぜならば、キリストが私のマイナスを全部引き受けて、

「お前に生命をやるよ。私はお前の中に宿るよ。それが私の願いだ」

と。本当にありがたいと思し召しなんです。私が善人だからでもなく、私が善いことを行つたからでもなく、ただひたすらキリストは私を愛して、私が悩んでいたときに私をつかまえて、

「もう悩まなくてもいい。私がお前の道だ。お前の生命だ。お前を生命で満た

す。導いていくよ。私と一緒に歩こう」

と言って肩をたたいて、私の中に宿ってくださいました。だから、私を独りおきたまわらない。私はもう自分が無くなって、十字架で片づけられていますから、キリストが全部引きうけて、^{ふる}「旧き奥田は死んだ。新しい奥田が生きている。私の霊と一つになって生きている」奥田はもとの奥田ではない。大丈夫だよ。わしが付いているよ」

と。この「わしが付いているよ」という、これがうれしいですよ。皆さん、誰かにポロクソに言われたら、ぜひ言ってほしい。

「何を言っているんだ。私に付いていらっしやる方が見えないの？ 私を見たものはキリストを見たんだよ」

「そんなもの見えないよ」

「そうか、しかたがないね」

と。本当に一人ひとりにそこまで言わせるんです、キリストという方は。

「私は学問がないから、そんなことは言えません」

「生命は学問では得られないよ。生命は、それをいただくことによつて、飲むことによつて、食べることによつて、生命は生命づけられるんだ」

「私は善人ではありません」

「善人には私は用がない。私があるのは悪人だよ」

と。そうでしょ。キリストは、

「私が来たのは、義人を、^{ただ}義しい人を招くためではない。罪びとを招いて、ひっくり返して天国へ連れていく。そのために私はやって来た。神の好まれたものものは犠牲^{いけにえ}ではなくて憐憫^{あわれみ}である。健やかなる者は医者^{あはれみ}を要せず、医者^{あはれみ}を要するものは病める者である」

と。みんなキリストの言葉はひっくり返しなんです。親鸞もそう仰った。

「善人なおもて往生す。いわんや悪人においてをや」

と。善人は自分の善により頼む。「俺もこんな善い人間だから、きつと浄土に行けるよ」と、こういうより頼むものがある。これはだめだよと。悪人はより頼むものが何も無い。本願だけに頼む。その本願がその悪人をつかまえて、弥陀の御国につれていく。だから、「悪人正機^{しようき}」と言ったでしょ。

キリストもそうなんです。己を何ものかと思っている人には用はない。自分が義^{ただ}しいと思っている人には用はない。パウロも自分は義しいと思っていた。キリストを迫害していた。ひっくり返されて目が覚めた。不思議なんです。

本当にキリストという方は誰に宿ってくれるのか。「来てください」とお願いする人に来てくれる。「私のお宿に泊まってください」と言ったら、来てくれる。

「私の体の中に入ってください」



「ああ行くよ」

「いえ、こんな汚れた人間ですけれども」

「心配いらん。私が清めたから。十字架で全部清まってるよ。大丈夫だよ」と言つて、キリストは入つてくださった。本当にありがたいですよ。

「³⁰此等のことを語り給えるとき、多くの人々イエスを信じたり。³¹爰にイエスが信じたるユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり。³²また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし』」(ヨハネ8・30〜32)

本当のことを知るといふことが、本当に自由にしていたくことだよと。

学問は真理の探求なんです。それがどうも残念ながら、この世の学問というのは、神さまだけだめなんです。神さま以外のことは本当にいろんなことを究めつくしてきました。でも、神さまの世界だけはどうもなかなか大変みたいですね。

はい、次へいきます。ヨハネ伝10章22節、

「²²その頃エルサレムに宮潔の祭あり、時は冬なり。²³イエス宮の内、ソロモンの廊を歩みたもうに、²⁴ユダヤ人ら之を取囲みて言う『何時まで我らの心を惑わしむるか、汝キリストならば明白に告げよ』」

「キリスト」といふのは「メシヤ」、神から「膏注がれた者」、救世主です。しかも、当時思われていた救世主というのは、ユダヤの国を独立させ、ローマの支配から脱却して、あのダビデ王国を築き上げる、そういう非常に現世的な意味でのメシヤと考えていた。「ひよつとしたら、この人がキリストか」というふうな噂が流れるものですから、

²⁵イエス答え給う『われ既に告げたれど汝ら信ぜず、わが父の名によりて行くわがは、我に就きて証す。²⁶されど汝らは信ぜず、我が羊ならぬ故なり。²⁷わが羊はわが声をきき、我は彼らを知り、彼らは我に従う。』

「羊」と仰つた。羊というのは弱い動物です。狼がきたら、たちまち食われてしまうような弱い生きものです。また、従順な生きものだそうです。羊飼いは一匹一匹の羊をその名前をもつて呼び出すという。一匹一匹に「太郎」とか「二郎」とか「花子」とか名前がついている。そういう羊飼いと羊の関係にご自分を例えられた。

「あなた方が信じないのは、私の羊ではないからだ。私の羊は私の声を聞き分ける。私は彼ら一人ひとりを知っている。そして、彼らは私に従う」

と。そして、

²⁸我かれらに永遠の生命を与うれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、又かれら我が手より奪う者あらじ。²⁹彼らを我にあたえ給ひし我が父は、一切のものよりも大なれば、誰にても父の御手よりは奪うこと能わず。³⁰我と父とは一つなり』(ヨハネ10・22〜30)



と。素晴らしいですね、

「我と父とは一つなり」

という。

●一粒の麦

ヨハネ伝は終わりになりますと、だんだん凄くなってくる。こういう告白が出てくる。そして、ヨハネ伝12章、有名な「一粒の麦」ということが出てきます。

「²³イエス答えて言い給う『人の子の栄光を受くべき時きたれり。²⁴誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。²⁵己が生命を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。』」(ヨハネ12・23)

²⁵

これは躓きの言葉ですよ。 「己が生命を愛して何が悪いか。己が生命を憎むなんてとんでもない。学校でも、自分を大事にしなさい、危ない所に行ってはだめです、変な人について行つてはだめです、とみんな教わっていますよ。人を見たらドロボーと思えとみんな教わっているじゃないですか」と、皆さんは思われるでしょう。その通りですけれども、ここで言う、「己が生命を愛する」というのは「自分に執着する」ことなんです。

「旧き我、エゴイストの我」

人間の本性はエゴイスト、自己中心です。

そういう自分に執着したら、これはだめだ。そういう自分を突き離して、そして、私を求めて本ものを求めてきなさい。そうしたら、生命だよ」

と。そういうことなんです。

「己が生命に執着するものはこれを失う。この世にてその生命を突きとばしていく者、振り捨てていく者、そして、キリストの中に生きようとする人、その人は逆に自分の生命を全うする。之を保ちて永遠の生命に至るべし」

という。

「²⁶人もし我に事えんとせば、我に従え、わが居る処に我に事うる者もまた居るべし。人もし我に事うることをせば、我が父これを貴び給わん。²⁷今わが心騒ぐ、我なにを言うべきか。父よ、この時より我を救い給え、されど我この為にこの時に到れり。」(ヨハネ12・26、27)

イエス・キリストの心の中が描かれている。ずっと父の御意のままに生きてこられた。いつも一緒にいてくださった。それが今や引き裂かれようとしている。十字架においてキリスト・イエスは父なる神さまから捨てられる。本当に顔を背けられる。彼は罪とせられるんです。いわば我々が受くべき神の怒り、神の審判、それに対するその審判をキリスト



が一身に引き受けた。そして、十字架にかかった。だから、キリストは苦しまれた。自分の生命が惜しいとか、そんなのではなかったと思います。

「父はいつも私と一緒にいてくださる。決して私を離れたまわらない」

と、そう断言しておられたキリストが、なぜ、ここで悩まれたか。今、父と子の絆が引き裂かれようとしている。断たれようとしている。捨てられようとしている。それを目の前にして、キリストは心騒いだ。

「このために私はここに到ったのに、今、心騒ぐ」

と。このことを人は、「イエスも情けない人だ。ここに至ってこんな弱さを見せている」と言って批判する人もありますが、それはご自由です。しかし、私は、ここでイエスという人の心中を察するに、本当に誰一人イエスをわかってくれる人はいない。弟子たちもいない。自分独り、ただ独り。しかも、ここまで父と一つで歩んできた、夜を徹して山で祈られたようなキリスト、その方が今や父との愛の絆を断ち切れようとしている。暗黒に突き落とされようとしている。しかも、自分のせいではない。

「彼らを救わんがためにお前は十字架にかかれ」

という、その父の御意なんです。

「なんで、それが御意なんですか。もつと他に道はないんですか」

と。それがキリストのあのゲッセマネの祈りの叫びです。

「わが父よ、もし得べくばこの酒杯を我より過ぎ去らせ給え。されど我が意のままにはあらず、御意のままに為し給え」(マタイ26・39)

と。これがゲッセマネの祈りです。

「イエスの額から滴り落ちる汗は血のしずくのごとし。天使が現れてイエスを励ました」

と書いてあります(ルカ22・43〜44)。その直前のことですね、これは。

●十字架の死

「²⁷今わが心騒ぐ、我なにを言うべきか。父よ、この時より我を救い給え、されど我この為にこの時に到れり。²⁸父よ御名の栄光をあらわし給え」爰に天より声いでて言う『われ既に栄光をあらわしたり、復さらに^{また}顕さんに^{あらわ}傍らに立てる群衆これを聞きて『雷霆鳴れり』^{いかつち}と言い、ある人々は『御使かれに語れるなり』^{また}と言う。³⁰イエス答えて言い給う『この声の来りしは、我が為にあらず、汝らの為なり。³¹今この世の審判は来れり、今この世の君は逐い出さるべし。³²我もし地より挙げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん』³³かく言いて己が如何なる死にて死ぬるかを示し給えり。』(ヨハネ12・27〜32)

十字架の死をここで示された。「この世の君は審かれるなり」と。イエスは十字架で碎か



れた。審かれた。その時、サタンも一緒に審かれているんです。サタンの力、悪霊の力と
 いうのはあの十字架で審かれている。

ですから、我々はこの世の中に生きますときに、キリストなしで手放して生きていけば、
 いつ足をすくわれるかわかりません。悪の霊は今もいますから。けれども、十字架を、キ
 リストを念じているならば、サタンは近寄ることができないんです。主の祈りの中にあり
 ます、

「御名を崇めしめたまえ。御国を来らしめたまえ。御意が天になるごとく、地
 にもならしめたまえ。今日一日の糧を我らに与えたまえ。我らの罪を赦した
 まえ」

と。そして最後に、

「我らを試みにあわせず、悪しきものから守りたまえ」

という祈りがある。そうなんです、悪しきものが今も満ち満ちている。本当に悪しきもの
 が満ち満ちています。人の心にそれが巣くって、いろんな悪しき計画を起こさせる。サリ
 ンをまき散らしたり、いろんな毒を造ったりとか。さまざまの考えられないような悪しき
 わざは、全部これは人のわざではない。悪霊がその人の中に巣くって、そういうことをな
 さしめているとしか言いようがないですよ。そういうものから逃れるためには、本当に我々
 はキリストの霊によつて守られていないといけない。武装をしていないと。我々は武器で
 武装しない。キリストの霊によつて、御言によつて、祈りによつて己を守って、そして、
 御国に到るまで己が道を全うする。私はそう考えているんです。その道をキリストは開い
 てくださった。

十字架において既にサタンの頭は砕かれている。サタンの子分はまだうるちよろしてい
 るかもしれないけれども、サタンの源は砕かれている。それをここで仰ったと思う。

「³¹今この世の審判は来れり、今この世の君は逐い出さるべし。³²我もし地より
 挙げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん」³³かく言いて己が如何なる死
 にて死ぬるかを示し給えり。」(ヨハネ12・31〜32)

と。それから少しとびまして、

「⁴⁴イエス呼わりて言い給う『われを信する者は我を信するにあらず、我を遣
 わし給いし者を信じ、⁴⁵我を見る者は我を遣し給いし者を見るなり。⁴⁶我は光
 として世に來れり、すべて我を信する者の暗黒に居らざらん為なり。⁴⁷人たと
 い我が言をききて守らずとも、我は之を審かず。夫わが來りしは世を審かん
 為にあらず、世を救わん為なり。⁴⁸我を棄て、我が言を受けぬ者を審く者あり、

わが語れる言こそ終の日に之を審くなれ。

キリストが語られた言すらもキリストのものではない。これは父の言である。父がキリス
 トを通して語られた言である。その言があなた方を審くことになる。それを踏みにじるな



らば、その言があなた方を審くことになる。

49 我はおのれに由りて語れるにあらず、我を遣し給いし父みずから我が言うべきこと、語るべきことを命じ給いし故なり。50 我その命令の永遠の生命たるを知る。されば我は語るに、我が父の我に言い給うまますを語るなり』(ヨハネ 12・44〜50)

●私を見た者は父を見た

そして、キリストの言の最後がこのヨハネ伝14章の1節から31節です。これは「決別遺訓」とか言われてまして、イエスが最後の晩餐で弟子たちに語られた言だということ。この言は、私はくり返し何度読んだかしのれない。読むたびに、何だか涙が出そうになりますね。ここまで私どものことを思ってくださいているのかと、その愛の深さにうたれる。これから十字架にかかるうとする人が、無残な死にぶつかろうとしているその方が、こんな言を遺して下さっているという、もうそのことにうたれる。弟子たちはおたおたします。そのことを見越して、「おたおたするんじゃないよ。大丈夫だよ」という励ましの言なんです。

「1」『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2 わが父の家には住処^{すみか}おとし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために処^{ところ}を備えに往く。3 もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。4 汝らは我が往くところに至る道を知る』5 トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、争でその道^いを知らんや』6 イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。7 汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』。ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』9 イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。』(ヨハネ14・1〜10)

ピリポは別れぎわに、

「父を示してください。神さまを示してください。あなたのお別れは辛いけれども、父を示してくださいれば我慢します」

と、こういうことを言ったわけです。ところが、イエスは次のように仰った。

「こんな長く一緒にいたじゃないか。」

3年ほど一緒に暮らしました。

こんな一緒に過ごしたのに、それでもまだわからないの？ 私を見たもの



は父を見たのである。どうして、父を示せなどと言うのか。私は父の中にいる。そして、父は私の中にいてくださる。そのことがわからないのか?」

と。私も世を去りぎわに言います(笑)。

「私を見た者はキリストを見たのであって、どうしてキリストを示せと言うの?」

私はキリストの中に生き、キリストは私の中に生きておられる。そのことがわからないの?」

と。皆さんも、そうやって仰ってくださいね。死に際でなくてもいいですよ。今からどうぞん言ってください。私は今から言いますよ、

「私を見た者はキリストをご覧になった。小さな私の中にキリストが光っていらつしゃる。もしそれがわからなければ、本当に私を知ったということにならないですよ」

と。私は、学生たちに接しても、ランナーたちに接しても、走る会の方々にも、裁判官の方々にも、いろんな方に一番知ってほしいのはそれなんです。一番知ってほしいことを日頃言わないという辛さ(笑)、秘めたる思い、それを今日はここで告白できるから、ここは最高の席です。その最高の席に皆さんは来てくださったんです。

●助け主・聖霊

キリストが一番願っておられることは、皆さん一人ひとりの中に宿って、皆さんを小さなキリストにしてしまうことなんです。

「キリストにならつて、キリストのような善き行いをしよう」

なんて、そんな真似まねごとではない。キリストなる霊なるお方が中に宿ってください。それを「聖霊」というんです。「助け主」という。そのお方があなた方お一人お一人の中に宿り給う。

ナザレにいらつしゃったイエスは、いくらイエスが凄いといたつて、どこへでも飛んで行くわけにはいかなかった。しかし、祈りをもつて、霊言れいげんをもつて御業みわざはなされた。ヨハネ伝の4章46節以下に記しるされているように、ガリラヤのカナに行かれた時、王の近臣が来て、遠く離れたカペナウムにいる、

「息子むすこを助けてください、カペナウムまでくだつて来てください」
とお願ねがいした時、

「帰れ、汝の息子は生くるなり」

と仰つた。帰つてみたら、その仰つた時に癒えていたという。そういう話が出ている。肉体なるイエスは飛んで行けないけれども、霊なるイエス、あるいはキリストの霊言、言葉は何マイル先であっても直ちにそこで作用する。これが霊の世界の凄さです。それをキリストがなされた。人としてのイエスは飛んでくるわけにいかない。けれども、今、霊なる



キリストは一人ひとりの中に宿りたもう。そして、御業をなさつてくださる。だから、天界に行かれたことは、本当に我々にとつてありがたいことだった。そのことがこれから出てきます。

「わが言うことを信ぜよ、我は父にあり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。12 誠にまことに汝らに告ぐ、我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。」

キリストが父の御許に往かれることがどんなにプラスかということ仰った。

13 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。14 何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。15 汝等もし我を愛せば、我が誠命を守らん。16 われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17 これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。

「助主」^{たすけぬし}「真理の御霊」^{みたま} また「聖霊」といいますが、このお方はキリストが天界に往かれてから父の名によつて遣わしてくださる。これがペンテコステという聖霊降臨節において成就しましたが、それ以来ずっと今も成就し続けております。この聖霊という方、助け主この方にキリストは望みを託された。イエスは地上で働きをなさった。天界に往かれてからは、この聖霊がすべてのことをなさる。だから、弟子たちに、

「聖霊を受けよ」

と仰った。この助け主、聖霊はあなた方に必ず宿つてくださる。そういうお方であると。

18 我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。19 暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。20 その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。21 わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし。22 イスカリオテならぬユダ言う『主よ、何故おのれを我らに顕して、世には顕し給わぬか』23 イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住処を之とともに為ん。24 我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くとこの言は、わが言にあらず、我を遣わし給ひし父の言なり。』(ヨハネ14・11〜24)

あなたが私を愛してくれるなら、必ず私の言を守ってくれるはずだ。そして、私の父はあなたを愛し、そして父と私と一緒にあなたのところに来て、そこに一緒に住む。住処と一緒にするよ。私を愛さない者は私の言を守らない。あなた方が聞いてい



る言は私の言ではない。私を遣わしたもうた父の言であると。

では、キリストはどんな言を遣されたかというのと、この前の13章34節に出てくる。

「私は新しい誠命をあなた方に遺しておく。あなた方は互いに愛し合いなさい。

私があるあなた方を愛したようにあなた方も互いに愛し合いなさい。あなた方が本当に互いに愛し合うならばそのことによつてあなた方が私の弟子ということを世の人は認めるから」

という、たった一つの誠命です。遺されたのはこれだけでした。

ヨハネ伝15章にいきますと、またそのことが言われている。

「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。¹⁰ ならんじら若し、わが誠命をまもらば、我が愛におらん、我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。¹¹ 我これらの事を語りたるは、我が喜びの汝らに在り、かつ汝らの喜びの満たされん為なり。¹² わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互いに相愛せよ。¹³ 人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。」(ヨハネ15・9〜13)

と、そういうことを仰います。だから、キリストが私たちに遺されたただ一つの誠命は、「私があるあなた方一人ひとりを命懸けで愛したように、今度は互いに兄弟姉妹が命懸けで愛し合いなさい。しかも、兄弟姉妹は今いる兄弟姉妹だけではない。無限に広い。今この檻の中にいる羊だけではない。この檻にいない羊たちも」

と、ヨハネ伝10章で言っておられる。

「我には亦この檻のものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず、彼ら是我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。」(ヨハネ15・16)

と。生きとし生けるものすべて、父の子であるはずなんです。そういうものたちを本当に愛しなさい。愛だけが人の道だということを仰った。

●キリストの分霊

ヨハネ伝14章に戻ります。

「²⁵ 此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、²⁶ 助主、即ちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。²⁷ われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼るな。

²⁸ 「われ往きて汝らに来るなり」と云いしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大なるに因る。²⁹ 今その事の成らぬ前に、これを汝らに告げたり、事の成らんとし汝らの信ぜんためなり。³⁰ 今より後われ汝らと多く語らじ、この世の君きたる故なり。彼は我に対して



何の権もなし。31されど斯くなるは、私の、父を愛し父の命じ給うところに
遵したがいて行うことを世の知らん為なり。起きよ、率いざいここを去るべし。」(ヨハネ
14・25〜31)

ヨハネ伝では実はこのあとも15章、16章と続いていくけれども、ここで一旦切れています。
このようにイエスが私たちに遺なしていかれた言葉、

「私は父の御許みもとに行く」

という。しかも贖あがない業わざ、罪の贖あがない、それを全まうして父の御許みもとに行く。そうしたならば今度は、
「助け主」と、自分とは別人格のように仰まっているけれども、実は天界くだから降くだってこら

れるキリストの霊、キリストの分霊です。そのキリストの霊が私たちの中に宿すりたもう。

霊の世界というのは本当に不思議です。無限無量なんです。何億人の人の中に宿すっても
なお少しも減らない。五千人の人たちに五つのパンと二匹の魚がわかち与たまえられて、なお
十二の筐かごに満ち満ちたというように、キリストの霊は何億の人に配くられても、なお豊かに
溢あれていく。太陽の光は無限無量であるように、キリストの生命いのちの光というものは無限無
量です。そして、人を生かしていく。人を暖め、人を生かしていきます。そういう存在に我々
一人びとりを造り変えてくださる。これが父の御意みこころなんです。

ただ永遠の生命をいただいて、「ああ、めでたい、めでたい」ではありません。不老長寿
だけではかない。そうではなくて、この我々が地上で生をうけているときに、もうひと
つ高次元の、高い次元の生命をいただく。それをいただいてこの地上を全まうする。そのと
きに私の身体はポロリと崩れ落ちるでしょう。そのときに新しい生命が羽はばたいて天界に
昇あっていきます。そういう存在です。

それを思いますと、心は躍ります。向こうでは、先に行つた方々が待つていてくれます。
何よりもキリストさまが待つていてくれる。パウロさんが待つていてくれる。ヨハネさん
が待つていてくれる。

「いやあ、ヨハネさん、私はあなたが好きでしたよ」

と。そうすると、向まこうも

「お前は私の言ことばをよく使つかったね」

と、そう言いつてくださる。そういう世界を私は想像する。ランナーたちだつてそうです。
ゴールするでしょ。みんなが待つている。「いやあ、よくゴールしたね。ヨタヨタだけれども、
よくゴールした」と。監督の胸に飛びこんでいくでしょ。素晴らしいではありませんか。
それが我々のレースです。そういう、人生のレースです。決して楽ではありません。本当
に楽ではありません。けれども、そこを走りぬいていく原動力はどこから来るか。これは
聖霊のキリストさまです。その方がついていてくださるから、パウロが言うように、

「われ倒るれども滅くびず」



という、そういう生き方ができるんです。

●パウロの生き方

そういった生き方をした人の言葉をこれから少し味わっていきます。それがパウロの言葉です。コリント前書1章18節、

「¹⁸それ十字架の言は

十字架という事実が語り告げている言は、

亡ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには神の能力なり。¹⁹録して『われ智者の智慧をほろぼし、²⁰慧き者の慧を空しうせん』とあればなり。²⁰智者いずこにか在る、学者いずこにか在る、この世の論者いずこにか在る、神は世の智慧をして愚かならしめ給えるにあらずや。²¹世は己の智慧をもて神を知らず(これ神の智慧に適えるなり)この故に神は宣教の愚かをもて、信ずる者を救うを善しと為給えり。²²ユダヤ人は徴を請い、ギリシヤ人は智慧を求む。²³されど我らは十字架に釘けられ給いしキリストを宣伝う。これはユダヤ人に蹟物となり、異邦人に愚かとなれど、²⁴召されたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも神の能力、また神の智慧たるキリストなり。²⁵神の愚かは人よりも智く、神の弱きは人よりも強ければなり。」(コリント前1:18~25)

パウロは大変な智者だった。当代一の学者といってもいい。またユダヤ教のチャンピオンだった。そのパウロがおのが智慧をかなぐり捨てて、キリストにのめり込んでしまいました。そういうパウロです。コリント後書5章13節、コリントの人たちに送った第二の手紙です。

「¹³我等もし心狂えるならば、神の為なり、心慥ならば、汝らの為なり。¹⁴キリストの愛われらに迫れり。我ら思うに、一人すべての人に代りて死にたれば、¹⁵凡ての人すでに死にたるなり。」

この「一人」はイエスのことですね。

¹⁵その凡ての人に代りて死に給いしは、生ける人の最早おのれの為に生きず、己に代り死にて甦えり給いし者のために生きん為なり。¹⁶されば今より後われ肉によりて人を知るまじ、かつて肉によりてキリストを知りしが、今より後は斯の如くに知ることをせじ。¹⁷人もしキリストに在らば新に造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、視よ新しくなりたり。¹⁸これらの事はみな神より出づ、神はキリストによりて我らを己と和がしめ、かつ和がしむる職を我らに授け給えり。¹⁹即ち神はキリストに在りて世を己と和がしめ、その罪を之に負わせず、かつ和がしむる言を我らに委ね給えり。」(コリント後5:13~19)

続きまして、コリント後書6章の1節から。

「我らは神とともに働く者なれば、神の恩恵を汝らが徒らに受けざらんこと



を更に勧め。2 (神いい給う『われ恵の時に汝に聴き、救の日に汝を助けたり』と。視よ今は恵のとき、視よ今は救の日なり) 3 我等この職の誇られぬ為、何事にも人を躓かせず。4 反つて凡ての事において神の役者のごとく己をあらわす、即ち患難にも、窮乏にも、苦難にも、5 打たるるにも、獄に入るにも、騷擾にも、労働にも、眠らぬにも、断食にも、大なる忍耐を用い、

また別なところでは、いろいろ自分が遭つた艱難のことを書いてます。それは凄いです。それをこういう抽象的な形で書きましたけれども。

そして、私はそこに自分を当てはめるんです。「患難にも」と、うむ、僕にも悩みがあるな。「窮乏にも」、うむ、かつては乏しかったと。今は乏しくありません。「苦難にも」、苦しみはあるな、今も。「打たるるにも」、いやこれはない。今は打たれてません。「獄に入るにも」、これもない。「騷擾」、あまり騷擾にも巻き込まれていません。「労働にも」、働かされております。「眠らぬにも」、時々徹夜に近いことをやらされます。「断食」、やったことはありません。こうして、自分と比較してみると、やはりパウロさんは凄いです。どういふときにも、「大なる忍耐を用い」という。私は絶対、人のせいにはしたくない。いろんなことで愚痴は言わない。愚痴なんか言いますと、ろくなことないですから。あの人があつと働いてくれたら、私はこんなにも働かなくても済むのにとか、時々思うことはありますけれども、人には言わない。これは私をキリストが用いてくださったのだから、ここで黙々と働くことがキリストの喜びたもうところであると――やせ我慢ではありません――私はそうやって自分に言い聞かせている。ああ、パウロさんにはとても及ばないと。

6 また廉潔と知識と寛容と仁慈と聖霊と虚偽なき愛と、7 真の言と神の能力と左右に持ちたる義の武器

これは何のことか私は知りません。

とにより、8 また光栄と恥辱と悪名と美名とによりて表す。

褒めてくれるやつがあるかと思うと、ボロクソに言うやつがいますし、いろいろ本当に様々です。それを一喜一憂していたらしようがない。何を言われようと、「はいはい、結構でございます」と。いい気になりません。そうでないといけません。次がおもしろいですね。

我らは人を惑わす者の如くなれども真、9 人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども、視よ、生ける者、パウロは本当にそうでした、何度も辛い目にあいましたから。

懲さるる者の如くなれども殺されず、10 憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。」(コリント後6・1〜10)

と。素晴らしいですね。ですから、皆さん、いろいろな辛い目にお遭いになりましたら、このパウロさんを思い出してください。パウロはもつと辛かったと。それからキリストさまを。



本当にキリストさまのことを思ってください。そして、キリストからくる慰めに、ぜひ、福音書をおしてキリストの慰めに満ちた言ことばに触れてほしい。

「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ。我なんじらを休ません」

と。そういう言がありますでしょ。それから、

「幸いなるかな、心貧しき者。天国はその人のものなり。幸いなるかな、悲し

む者。その人は慰められん。」

と。そうなんです。悲しみあるとき、辛いとき、そのとき行きどころはキリストなんです。キリストの懐ふとこに入りますと、本当にそこから得も言えぬ慰めが流れてきます。キリストの懐の中で泣きたいだけ泣いたらいい。本当に甘えていただきたい。そのことをこの世の人に知ってほしい。今は、この世の中で本当に希望を失っている青年たち、若い人たちに「希望を持って」と言ったって、無理な世の中かもしれません。

私は電車の中でもよく小さいお子さんを抱いているお母さん方を見る。本当に愛いっくしみに満ちている。けれども、このお母さんたちや坊ちゃんお嬢ちゃんたちはこれから先どうやって生きていくんだろうか。そういうことを思うと、辛いだろうなと思う。

「学校へ行ったら、いい成績とりや。上の学校へ行ったら、いい大学に入れよ。いい大学行って、ヘンなところへ就職したらだめよ。会社がつぶれるからね」

と(笑)。きつと心の休まるところはないでしょうね。子どもは子どもで、

「お母ちゃんは私にばかり期待する。お母ちゃんなんか嫌い」

なんて言って(笑)。そういうことを思いますと、やはり本当のこのキリストの世界に、お母さんも子どもさんたちもお父さんも学校の先生も、みなキリストのところに来てほしい。視野を広くしてほしい。一人ひとりを照らしていらつしやるキリストの愛の光にうたれて、それからもう一度、人生をスタートしてほしい。遅すぎることはない。今からでもやってほしいと。これが私の願いです。それで、どうにもならなかつたら、私をかりつけにしてください。これが結構です。一回きりしかかりつけになれません、残念ながら(笑)。だから、最初に私をかりつけにする人が一番幸せな人かもしれませんけれども。私は本当のキリストの言ことばに生命を懸けてほしいと思っっているんです。

●キリストと共に十字架に

それからガラテヤ書2章20節です。これが本当に私の原点ですね。

「²⁰我キリストと偕ともに十字架せられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト

我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我

がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。」(ガラテヤ

2・20)

「我キリストと偕ともに十字架につけられたり」と。キリストが十字架におつきになった。そ



の時、私も一緒にそこで死んでいた。旧き我は、罪深き我は、エゴイストの我は、あそこ
で一緒にキリストと共に十字架につけられて死んでしまった。だから、私は、旧い私は生
きていない。

「最早われ生くるにあらず。御霊みたまのキリスト、復活された聖霊のキリストが私
の中で今生きてくださっている」
と。その方と一つになって、私は生きています。

「今われ肉体に在りて、この世において生きていますのは、私を愛して私のため
にご自身の身を棄ててくださったこの神の子キリスト、このお方と一つにな
って生きていますのである」

と。「信ずる」というのは「一つになって」と、そう読み替えていただきたい。一つとなっ
て生きているのであるということですよ。

それから、エペソの人たちに送った手紙の2章1節、

「汝ら前まへには咎とがと罪つみとによりて死にたる者にして、²この世の習慣ならわしに従い、空
中の権とを執つかさどる宰さかん、すなわち不従順の子らの中に今なお働く霊の宰さかんにしたがい
て歩めり。

これはサタンのこと。コリント、ガラテヤ、エペソ、みんなこれは異邦人です。パウロは
異邦人への伝道者として用いられた方ですから、それまでの在来の宗教の中に生きていた
人たち、さまざまな宗教の中に生きていた人たちの中に本当のキリストの生命を伝えて行
った。大変なご苦労があったと思うけれども、そういう人たちへ宛てられた手紙です。だ
から、ここでも、

「あなたたちはさきには死んでいたんだろ。この世の習わしに従って、そういう不
従順の子らの中に今もお働いている霊に従って歩いていったんだろ。私たちがだっ
て一緒だったよ」

という。

³我等われらもみな前まへには彼らかれらの中うちにおり、肉の慾よよくに従いて日をおくり肉と心との欲

するまます隨まをなし、

自己中心的に、肉の欲するままにやっていたと。

他の者のごとく生まれながら怒いかりの子なりき。

「怒の子」というのは、神の怒りの対象という意味です。「怒りっぽい」ととっていただい
ても結構ですけども、注解書を開きますと、これは「神の怒りの対象となつてい子、神
の審判のまことなる子」という。そういう姿だったと。パウロ自身ですね。

……(この時、地震あり)……

地が震つてますよ。不思議ですね。地が震いました。天も震っているかもしれません。まあ、
つぶれれば皆さんと一緒に天国に行きますから。ここにいる方、全部連れていきますから



(笑)。この会場にいて天国へ行けないなんて、そんなことはあり得ないです。はい、続いて行きますよ。

4されど神は憐憫あわれみに富み給うが故に我らを愛する大なる愛をもて、⁵咎とがによりて死にたる我等をすらキリスト・イエスに由りてキリストと共に活かし(汝らの救われしは恩恵めぐみによれり)。共に甦よみがえらせ、共に天の処ところに坐せしめ給えり。

十字架で死んだのも一緒、甦よみがったのも一緒、天のところところに坐するののも一緒。キリストはいつも私たちと一心同体となつてくださっている。一人芝居をなさつてくださっている。本当に一人芝居です。私たちは知らなかった。気がついてみたら、こんなふうになっていた。ああ、ありがたいことだと。そういうことなんです。

7これキリスト・イエスに由りて我らに施したもう仁慈なまけをもて、其の恩恵めぐみの極めて大なる富を、来きたらんとする後の世々に躰あらわさんとてなり。⁸汝らは恩恵により、信仰によりて救われたり、是これおのれに由るにあらず、神の賜物たまものなり。

神さまからのプレゼントだと。

9行為おこないに由るにあらず、これ誇る者のなからん為なり。¹⁰我らは神に造られたる者にして、神の預あらかじめ備え給いし善き業わざに歩むべく、キリスト・イエスの中に造られたるなり。」(エペソ2:1~10)

私たちは自分は何ものかということ、こういつた神の言によつてはじめて自分というものものの本性を知るんです。それは自分で自分を判断しますよ、いろいろと判断をすることあります。けれども、神さまの側から見て、あなたはどんなものであるか、どのようにしてどうなっているのか、ということはこの聖書の言によつて初めてわかるんです。それに素直に「はい」と言う。私は素直に「はい」と言ってます。だから、

「一緒に甦よみがえられた。共に天の処ところに坐せしめ給えり」

とあれば、私は、「ありがたい。恵みにより信仰によつて救われた。ああ、ありがたや」と言う。

「神の賜物だ。お前の行いではない。誇るものがないように」

「はいそうです。誇ることもなくしませんよ」というわけです。

「我らは神に造られたる者にして、神の預あらかじめ備え給いし善き業わざに歩むべく

全部神さまのご計画の中に我らはある。神さまの書ふみの中に私たちの人生が刻み込まれてある。それが実現していくだけだというわけですね。

キリスト・イエスの中に造られたるなり」

という。

●キリストの愛のいかばかりなるか

それから少しとんで、エペソの3章14節から19節。これはパウロの祈りです。



「¹⁴この故に我は天と地とに在る諸族の名の起るるところの父に跪^{ひざまず}きて願^{ねが}う。¹⁶父その栄光の富にしたがいて、御^{みたま}霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、¹⁷信仰によりてキリストを汝らの心に住ませ、汝らをして愛に根^ねざし、愛を基^{もと}とし、¹⁸凡^{すべ}ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何^{いかばかり}許^{ゆる}なるかを悟^{さと}り、¹⁹その測^{はか}り知る可^べからざる愛を知^しることを得^えしめ、凡^{すべ}て神に満^みてる者を汝らに満^みたしめ給^{たま}わん事を。」(エペソ3・14~19)

と。パウロのエペソの人たちのための祈りは私たちのために祈^{いの}つてくださっている祈り、キリストの祈りです。こんなことを祈^{いの}っていてくださっている。決して、彼らが金持ちになりませんよとか(笑)、そんなことを祈^{いの}つておられない。

「キリストがあなた方の心に住んでくださるようになり、愛に根^ねざし、愛を基^{もと}とし……キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何^{いかばかり}許^{ゆる}なるかを悟^{さと}り」

と。これはキリストの愛です。「キリストは愛」と言^いつてもいい。こういう本当の内的な霊的な祝福で満^みたされるように、圧^{おさ}倒^たされるようにと、そういうことを祈^{いの}つてくださっています。

それから、次のピリピ書、ピリピの人たちへの手紙です。2章5節、

「⁵汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。⁶即ち彼は神の貌^{かたち}にて居^ゐ給^{たま}いしが、神と等しくある事を固く保^{たも}たんとは思^{おも}わず、⁷反^{かえ}つて己^{おのれ}を空^{むな}しくし僕^{しもべ}の貌^{かたち}をとりて人の如^{ごと}くなれり。⁸既に人の状^{さま}にて現^あれ、己^{おのれ}を卑^{ひく}うして死に至^{いた}るまで、十字架の死に至^{いた}るまで順^{したが}い給^{たま}えり。⁹この故に神は彼を高く上げて、之に諸^{もろもろ}般^{ぱん}の名にまさる名を賜^{たま}いたり。¹⁰これ天に在^あるもの、地にあるもの、地の下にあるもの、悉^{ことごと}くイエスの名によりて膝^{かか}を屈^かめ、¹¹且^{かつ}もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言^いいあらわして、栄光を父なる神に帰^{かえ}せん為^{ため}なり。」

(ピリピ2・5~11)

ピリピの人たちのことをとてもパウロは愛^{あい}していました。非常に小さな集まりだったようです。

「キリスト・イエスの心をもて我なんじらを恋^こい慕^ぼう」

ということまで言^いっている。本当に親^{おや}しみをこめて語^{かた}った書簡が「ピリピ人への手紙」なんです、その中に、あなた方はこうであ^あつてほしいというパウロの心が表^{あら}われている。キリストのように生きてほしい。この方は本当に天のところをいらつしやつたのに、その天の御^{みくら}座を棄^すてて、人の姿とな^なって地に宿^{とど}ま^まりてくださり、死に至^{いた}るまで神の御^{みことば}意に従^{したが}いきてくださ^さった、そういうお方である。そして、最後は十字架の死だった。だからこそ、神さまは彼を誰よりも高いところに引き上げたもうた。すべての人が膝^{かか}をかがめて、「イエス・キリストは主である」と、そう告白^{こぼ}するように。そういう御^{みこころ}意からであると、そういうことがここで言^いわれています。



そして、最後に、パウロの嘆き、パウロの涙です。3章17節、
 「¹⁷兄弟よ、なんじら諸共に我に倣うものとなれ、且なんじらの模範となる我らに循いて歩むものを視よ。」

これは一方でプラスの方の人たちです。これらをお手本にしてほしいと。それから他方です。
¹⁸そは我しばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おければなり。

実に今もなおキリストの十字架に敵して歩んでいる者が多い。これがパウロの痛み、涙です。
¹⁹彼らの終は滅亡なり。おのが腹を神となし、己が恥を光榮となし、ただ地の事のみを念う。

こんなことを最後に持ってきたのは少々私は心痛みます。私が自分の身の回りを見ます時に、

「どうしてこのキリストに目覚めてくれないのか。地のことばかり思わないで、この世のことでいがみ合わないで、どうして本当に目を天に向けてくれないのか。

そこは豊かな国なのに。キリストをいただいたら、どんな苦難の中でも本当に微笑んで喜んで生きていけるのに。どうして、行き詰まったら絶望だと言って自分で自分の生命を絶とうとなさるんですか。この方を知ってください」

という、この呻きが私の中にあります。それがこのパウロの呻きだと思っんです。本当にキリストにすがってほしい。キリストの愛を受けてほしい。誰のためでもない。あなたのためという、この祈り。これを知ってほしかったので、これを最後に持ってきました。

そして、キリストにつかまえられた私たちはといえ、

²⁰されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。²¹彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて己が栄光の体に象らせ給わん。」(ピリピ3・17、21)

と。これがパウロの望みです。私どもの望みです。

●キリストの輝き

私は自分のことはあまり語りませんでした。ご存知の方もいらっしやいますけれども、私には二人の孫がいます。上はもう18歳になった男の子です。次男の方は12歳です。二人とも、生まれて6か月のときに、筋ジストロフィーという宣告を受けました。だから、ずっと車椅子生活です。ものすごく可愛い。ものすごく天真爛漫です。もう18歳といえば大学に入る年齢でしょ。12歳といえば中学校に入る年齢です。その孫のことを思いますときに、私はいつもこの聖書の世界を思います。この子たちのためにちゃんと天に処が備えられている。今この世ではこのように不自由な身体で、いわば十字架を負って生きている。しかし、それは御意によると。この子たちがけなげに文句も言わないでひたむきに生きているその



姿。この子たちを支えている多くの人たち。この方々こそ神に祝福された人たちであると、そういう思いで私はいます。

私は毎日でも子どもに会いたいけれども、忙しくてなかなか会えない。たまに学校に行きかけに子どもにすれちがうと、「あつ、おじいちゃん、今日会えてうれしかったよ」と言ってくれる。私は自転車で、「バイバイ」と言いながら、もう学校へ行かなければならない。そんな生活なんですけれども、たまに会えますと、「会えてよかった、うれしいよ」と言ってくれる。そういう子どもたちがいてくれる。私はその子どもたちと一緒に生きていくという思いがありますから、もうこの地上のことは本当のところ二の次、三の次なんです。さきほども、私が学士院会員に選ばれたりとか、きよくしつだいじゅしょう旭日大授章(日本の勲章の一つで、旭日章の最高位)をいただいたりとか、そういうお話もありましたけれども、それはキリストが私を世にアピールして下さって、

「あの人はああいうことになったけれども、あの人の本質は実はキリストなんだよ。

あの人は24歳のときからキリストに従って、つまず躓きながら、転びながら、悩みながら今日までやってきた。そして今、輝いている。彼は永遠の生命いのちだよ。私は彼に永遠の生命を与えた。だから、どうか、他の方々も奥田という人に接したら、その中に輝いているものを、その中の生命を汲み出し、汲み取ってほしい」と、そうキリストは願っておられると思うんです。

ですから、どうぞ、今日の講演を聞いて下さった方は、私のこの話を通して、もう一度、ご自分で福音書を読み、パウロの手紙を読み、あるいはこの小さな小冊子『エン・キリスト』を読んで下さって、私の皆さまに願っていることをお聞きとどけただければ幸せだと思います。そして、今、悲しんでいる人、泣いている人と私は一緒に喜びたいと思っておりますので、そういう人たちこそ私の友であります。では、これで終わりいたします。

● 祈り

それでは、ひとことお祈りさせていただきます。主イエス・キリストさま。こうして、ここに集まって下さった皆さまお一人お一人と心を一つにし、思いを一つにして、あなたの語ってくださったみことば御言、そしてあなたの愛の御思みいの中にひたることができました。ありがとうございます。どうぞ、この余韻が、今日集つどって下さったお一人お一人の中にとだよって、また来年お目にかかれますときまで、どうぞ、大きな御業みわざをなさってくださいますように。主イエス・キリストの貴き御名みによってお祈りいたします。

(『エン・キリスト』誌第60号、2007年10月発行より掲載)

